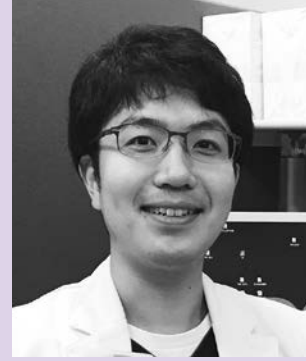


私のカルテ

No 3 6 8

津島市民病院
放射線科医師

北林

佑季也

肝細胞がん治療における
肝動脈化学塞栓療法という選択

はじめに

肝細胞がんとは

肝臓は食事から体内に摂取した栄養から体に必要な成分を作り出す(代謝)、体内の有害物質を解毒する(解毒作用)、胆汁を作り出し食物の消化を助ける(胆汁生成、分泌)という3つの極めて重要な働きを持つ臓器です。

肝細胞がんはその肝臓の細胞(肝細胞)ががん化して生じる悪性腫瘍です。

肝細胞がんの原因

肝細胞がんの発生する要因として、B型肝炎ウイルスやC型肝炎ウイルスの感染による肝炎や多量飲酒が大きな割合を占めています。

肝細胞がんの治療

肝細胞がんの治療は、肝切除(手術)、ラジオ波焼灼療法(局所療法)、肝動脈化学塞栓療法を中心に薬物療法、肝移植、放射線治療も選択されることがあります。

これらの治療法の中から、残された肝臓の機能、肝細胞がんの進行具合により治療方針を選択していくこととなります。

津島市民病院では他の医療機関とも連携して肝細胞がんの治療を行っていますが、今回はとくに肝動脈化学塞栓療法に関してどんな治療なのかご説明したいと思います。

肝動脈化学塞栓療法とは

肝動脈化学塞栓療法は血管の中にカテーテルといわれる細い管を通して行う、血管内治療(カテーテル治療)の一種です。血管の中をカテーテルが通るだけでは痛みは感じないため、治療は皮膚から血管の中にカテーテルが入る部分の局所麻酔ですることができます。このため全身麻酔は必要としていません。

足の付け根などの比較的末梢の血管から、カテーテルを血管の中に入れます。肝臓の血管と足の血管は体の中ではつながっているので、この血管の中を伝って、肝細胞がんにも栄養を届けている血管を選びます。カテ

ーテルががんにも栄養を届けている血管まで到達したら、そこから直接抗がん剤と呼ばれるがんを倒すための薬を肝細胞がんにも届けます。その後、がんにも栄養を届けている血管に塞栓物質とよばれるものを注入し血管をふさいでしまうことで、がんを兵糧攻めにします。

肝動脈化学塞栓療法のメリットとデメリット

肝動脈化学塞栓療法では、肝切除(手術)、ラジオ波焼灼療法(局所療法)で治療しきれないような大きながんや数の多いがんも治療できることが一番のメリットです。その他、手術に比べると治療から半日もすれば歩けるようになるので治療からの回復も早い点があります。デメリットとしては肝動脈化学塞栓療法ではがんの成長を抑えられても、完全に治しきること(根治)は困難とされています。しかし前述したように肝切除(手術)、ラジオ波焼灼療法(局所療法)で治療しきれないようながんでも進行を遅らせることで、元気でいられる時間を稼ぐことができます。

津島市民病院では2018年8月に肝動脈化学塞栓療法をするための透視装置という機械が最新のものに変更されました。これにより、以前より治療中のカテーテルやがんそのものが鮮明に確認できるようになりました。

おわりに

肝細胞がんはウイルス性肝炎の治療の進歩により今後、減少が予想されています。しかし、今はまだ日本人において死亡数の多いがん第5位にランクインしています。

さまざまな治療法がありますので治療に際しては主治医とご相談の上、適切な治療をご選択ください。